ちょっと釣り道

［ 小呂島 藍は青より出でて 青より碧し編 ］

Vol.20

①小呂島　②てのひら大のカンパチの子　③小呂島の渡船場　④そんなに大きくないアジ　⑤ヘリポート

青い空のスカイブルーは、碧き海のマリンブルーを倍加させる。海は空の色を映す。その日の玄界灘はどこまでも青かった。

ここは小呂島（おろのしま）。鎌倉時代、帰化した博多商人と宗像大社の間で領地争いも起きたこの島は、その昔海上交通の要衝でもあった。今は江戸時代に福岡藩から移住の使命を帯びた5人組を祖とする人々が暮らす。ほとんど壱岐島と同緯度の対馬海峡上にありながら行政上は福岡市内に属する、真に近くて遠い島である。

海上に突き出た岩山と形容しておかしくないその島影は、周囲を文字通り断崖絶壁に囲まれている。実は砂浜がほとんど無いのだ（ホントはあったらスミマセン）。この峻険な孤島に、よくもまあ上陸し、険しい地形を開墾されたものだと古人（いにしえびと）の労苦に思いを馳せる。

この島、そこらへんの近郊の離島と違い、一般向けの宿泊施設や商店などが無いのだが、これでは確かに生半可なレジャーで訪れるのは憚られるように感じてしまう。また防波堤が異様に高く、港周りの水深もごく深い。自然の猛威、玄界灘の荒波による侵食から、港湾施設を守るためには、そうならざるを得なかったのだろう。欠航にならずに定期船が出たら、姪浜からの渡船で約一時間半、この島に着く。メインである釣り場の大波止に向うとイヤでも目につくのはヘリポート。これでこの島のハンパなさを思い知らされる。

この大波止では絶海の孤島にふさわしく、イシダイ・アラなどの大物の他、真鯛やハタ類等の高級魚、ヒラマサ・アジなどの大型回遊魚が狙える。今日は正味3時間程度の滞在なので手軽にアジの大物を狙う。港内のクリアブルーの海面にルアー（疑似餌）が沈んでいく。そこだけ見ると魚が釣れる気はまったくしない。深場に沈み見えなくなってから竿をしゃくってルアーをはげしく動かす。手元に戻って来たことが目視できるようなとこまでルアーを巻き取ったところで、気配すらなかった透明な水中から黄金色の影がいくつも飛び出してルアーにアタックしてくる。手元にガツンッと激しい衝撃が伝わり、激しいファイトで手元に寄ってきたのはてのひら大のカンパチの子。北部九州ではネリゴと呼ばれ、夏の訪れを感じさせる初夏の風物詩である。また真っ青なコバルトブルーの小斑点が美しいナンヨウカイワリも遊んでくれた。

この島への定期船は、基本一日一往復。週三日は二往復となるが、少しの風、波高、霧ですぐ欠航となる。渡れても帰りは欠航となり帰れないかもしれない。

福岡市内で姪浜漁港から手軽に渡れはするが、気象・海況をちゃんと読まないと迂闊に渡ってはいけない島。正直こんな小さな魚と戯れておくにはあまりにも勿体ない大物の可能性を秘めた孤島。でも行ってみたら、非日常の楽しさをもたらしてくれる離島。そんな秘境っぽい島がなんと！福岡市内にあるとご存知でしたか。

この島らしくない小アジで残念